

映画に映る社会～スペインの民主化からの変容～

フアン・ロメロ・ディアス

1. はじめに

フランシスコ・フランコ総統の死後よりスペインは、政治的、社会的、経済的、文化的変化を遂げてきた。本稿では、スペイン社会に関わる重要なテーマを8つ取り上げ、各テーマの側面を反映した代表的な映画を通して、民主主義への移行期から現在までを概観することにした。

2. 民主主義への移行期

民主主義への移行期は、1975年11月20日にフランコが死去したことに始まった。しかし、その完了の時期については、意見が一致していない。多くの歴史家は1982年10月と考えている。1982年10月の総選挙でスペイン社会労働党が勝利したことで、政治体制の変化を牽引していた民主中道連合の統治が終わったためである。

フランコの死後、2日間でフアン・カルロス皇太子が44年ぶりに新国家元首及び国王に即位した。民政移行初期には、改革推進派がいる一方、独裁政治の支援者も存在した。フランコ独裁後期の指導者であったアリアス・ナバーロは、フアン・カルロス1世の即位後、首相となったが、君主制下での民主改革に反対したため、国王は彼に辞任を求めた。その後、1976年7月5日、アドルフォ・スアレスが首相となった。新首相は政治改革法を立案し、フランコ政権下で選出された国会議員により可決された。また、上下院を創設し、新しい憲法を起草した。1977年6月15日には、41年間行われなかった自由選挙が実施され、アドルフォ・スアレスの民主中道連合が勝利した。1978年12月6日、新憲法が賛成過半数で可決され、それはスペインを立憲君主制の政治形態とする社会・民主的な法治国家と定義するものであった。また、スペイン各地の歴史的背景を認め、それぞれの自治権を承認し、市民の自由と権利を宣言するとともに、死刑を廃止した。

民政移行初期におけるスペインの経済状況は、石油価格の上昇に起因する世界的な経済危機が起こり、インフレ率が20%まで急上昇した。失業率は労働者100人中6人にまで達した。改革は危機によって暗礁に乗り上げ、

さらなる社会不安を引き起こす可能性があった。しかしながら、このリスクは、政府、経済界、政界や労働組合が経済安定化計画「モンクロア協定（1977年3月1日）」に同意することによって軽減された。1979年の総選挙は、アドルフォ・スアレス首相の民主中道連合が勝利したが、スアレス政権内部において権力闘争が起きたことにより、1981年1月、首相は辞任した。それに伴い、レオポルド・カルボ・ソテロが後継者として選出された。1981年2月23日には、治安警察中佐のアントニオ・テヘロがスペイン下院議会を襲撃するという軍事クーデター未遂事件がスペインで発生した。国の民主主義の発展を受け入れない軍の一部が行ったこの試みは、国王の迅速な介入により、失敗に終わった。1980年代初期、民主中道連合はスペイン経済構造の近代化のみならず、行政、軍、治安部隊の改革に着手することも叶わなかったため、多くの市民が自由を求め、デモを行った。その結果として、早期に総選挙が行われ、1982年10月28日、フェリペ・ゴンサレス率いるスペイン社会労働党が勝利することになる。経済的調整やインフレの制御などの政策を行い、福祉国家への歩みを推し進めた政府として、今日に至るまで記憶されている。

文化的な面においては、1980年代は、美術館、コンサートホールや文化センターが設立されるなど、野心的なプロジェクトが生まれた変革の時期であった。マドリードでは、「モビーダ」(movida madrileña)と呼ばれる創造的な芸術運動が起こり、社会労働党政権とティエルノ・ガルバン市長がそれを支持した。映画界のペドロ・アルモドバル監督は、反体制派の雑誌に漫画を寄稿したり、実験的な演劇集団と交流したり、パンクバンドに属していたりするなど、「モビーダ」で最も代表的な活動家であった(Andrés 2004)。

「モビーダ」というテーマを取り上げたものとして『ペピ、ルシ、ボンとその他大勢の娘たち』(1980)(原題: *Pepi, Luci, Bom y otras chicas del montón*)が挙げられる。本作品は、スペインにおける民主主義移行期を表現した初期の映画のひとつと考えられている。アルモドバル監督は、「技術的な問題よりも自身の考えを表現することへの懸念から、本作品の公開は非常に難しかった」と述べている。本作品は、文脈において、様々な側面を露呈しようとする情熱が爆発したものとして捉えられるべきである。それには常に新しいものを求める若い世代の姿を重ねることができる(Cuevas 2014)。

ここに映し出されているのは、スペインにおける狂気のモビーダが起こった懐かしの前時代と、新しい世界を創造すべく次々と誕生した多くのパンクバンドと、独裁体制下と何ら変わらない大衆とが共存している姿である。

主人公は、ペピという名のバルコニーで大麻を栽培している女性である。ある日、警察官に見つかり逮捕されそうになった時、彼女はそれを見逃して

もらう代わりに性交渉を持ち掛けるが、逆に強姦されてしまう。その復讐のため、警官の妻、ルシに近づくが、彼女がマゾヒストであることが明らかとなる。そこで、ペピの友人、ミュージシャンでレズビアンのボンが、彼女に暴行を加えることにする。

3. 失業

民主主義の到来以降に起きた、スペインの主要な社会経済的な問題は失業である。スペインの失業率は、欧州連合諸国のうち、ギリシャに次いで 2 番目に高い。それ以前から、経済の好況時にも失業率は高く、構造的失業の様相を呈していると考えられる。また、高い貧困指数のみならず、経済的要因によって引き起こされる社会的不平等の値も高い。労働力調査によると、2018 年第 3 四半期のスペインの失業者数は 332 万 6,000 人で、失業率は 14.55% である。失業率は 2008 年に急速に上昇し、2010 年には 20% を超え、2014 年の第 3 四半期には労働人口の 23.67% に達した。また、2018 年には、25 歳未満の 34.6% が失業した (Instituto Nacional de Estadística 2018)。ここ数年、汚職や詐欺、経済的な問題に次いで、失業はスペイン社会にとって主な悩みの種となっている (Centro de Investigaciones Sociológicas 2015)。

図 1 は、1990 年から 2018 年までのスペインの失業率の変化を示している。最も失業率の高かった年は 2012 年で、失業率が 25.77%、失業者は 620 万人であった (Instituto Nacional de Estadística 2018)。

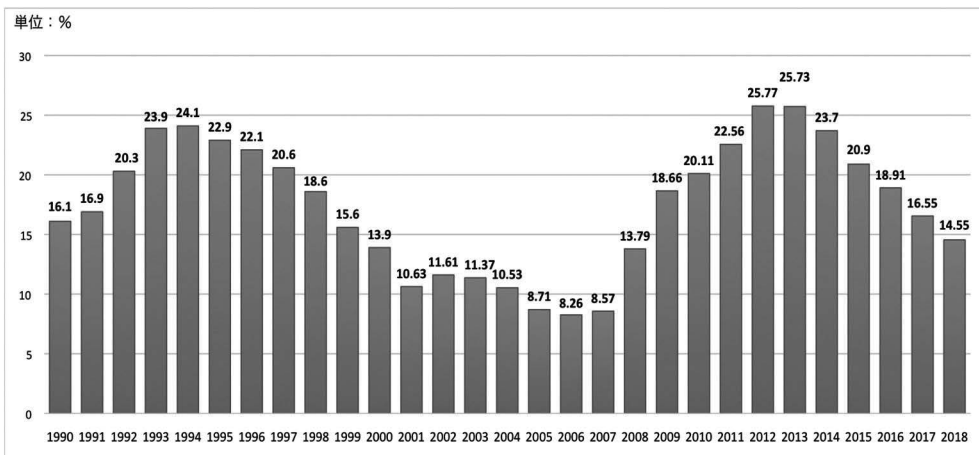


図 1 スペイン失業率(1990 年～2018 年)

フェルナンド・レオン・デ・アラノア監督の『月曜日にひなたぼっこ』(2002) (原題: *Los lunes al sol*) は、この失業問題を描いている。本作品のキャッチコピーは、「この映画は一つではなく、何千もの実話に基づいてい

る」(筆者訳)である。本作品は、解雇されたばかりの労働者と警察の実際の殴り合いの映像から始まる。次に、そのいきさつである 200 人の失業者を出したオーロラ造船所の閉鎖というフィクションが続く。本作品のテーマは、失業がもたらす不安、恐怖、絶望、挫折に直面している労働者たちの生活である。

本作品では、働かない者は、経済的のみならず、社会的、情緒的安定をも欠いている存在、つまり、人間としての展望を持たない者として描かれている。スクリーンの中で海を見つめる失業者たちは、カンタブリア海の輝く太陽の下、リラックスしているように映る。しかし、実際にそうではなく、どのように自分の抱える問題から逃れるかを考えているのだ。Ravaschino (n.d.)によると、それこそが本作品のタイトルになっている。月曜日も仕事がないため、日曜日と同じようにひなたぼっこができる。しかし、決して月曜日は日曜日ではないのだ。なぜなら、彼らには太陽は昇らないのだから。

4. 移民

移民は 1990 年代半ば以降、大幅に増加した。多くの移民が必要書類を持たずに到着し、スペインの経済に統合されていった。これらの移民は家事労働、農業および建設業などのスペイン人が従事したくない仕事に就いた。一部の移民は社会保障システムに統合されていったが、移民が増加したことで、スペイン国民より激しい拒絶反応が起こった。そのため、政府の法案は、EU で職を得たいと夢見る外国人にとって、一層困難となっている。しかし、出生率の低いスペインにおいては、移民はこれからも必要となるであろう (Andrés 2004)。

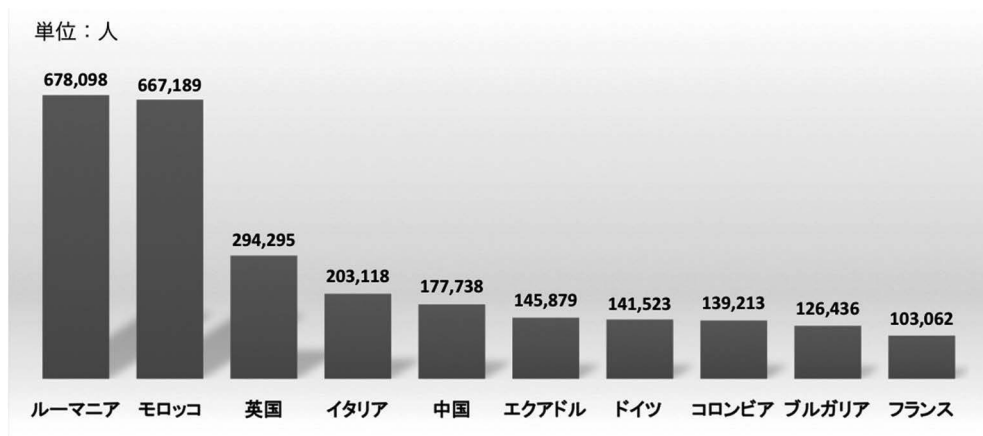


図2 スペインへの移民(2017年における外国人の人口)

数十年の間に、スペインは移住を促進させ、移民を受け入れる国になった。2000 年以來、スペインは世界で最も高い移民率を持つ国の一つになっている（米国の平均の 4 倍、フランスの 8 倍）。スペイン国立統計局によると、2017 年における外国人の人口は、約 440 万人であり、スペイン全体の 9.5%を占めている。図 2 は、スペインへの移民の出身国を示している。ルーマニアを筆頭に、モロッコ、英国、イタリアが続いている（Moreno 2017）。

『他界の花』（1999）（原題：*Flores de otro mundo*）という作品が、この移民問題を扱っている。カスティーリャのある村には結婚できる女性がいないため、男たちはバスに乗ってやって来た女性の集団の中から結婚相手を探すことにした。結婚後、住む家と安定を求める孤独な女性たちと村の男性たちとの間で文化摩擦が起こってしまうというストーリーである。

本作品は、遠く離れた地から都会へやって来るといふ現在のスペインの田舎の状況を描いたものである。高齢化と田舎の男女の孤独、また、不法移民である女性への現地の男性からの圧力が背景となっている。監督は、多文化共生の時代を迎えつつあるスペインを、性別、人種、年齢、教育、社会的階級など様々な面を描くことで、現実世界の一つのコラージュを創り出そうとしたのである。

5. 移住

国立統計研究所（Instituto Nacional de Estadística 2018）によると、出国したスペイン人 87,685 人のうち、帰国したのは 78,058 人であったことから、帰国者よりも出国者の方が多いことが分かる。スペイン人の出入国の記録によると、2017 年には 23,000 人が出国し、その内、帰国したのは 1 万人しかおらず、20 歳から 40 歳が最も多く移住した年齢層であった。つまり、多くの若者がより良い未来を求め、海外に移住しているということである。

2017 年の主な移住先は、イギリス、フランス、アメリカ合衆国、ドイツの順であった。この 9 年間、若者の移住は徐々に増加している。過去最も多く若者が移住した年は 2015 年で、約 42,000 人であった。そのうち、帰国したのは 17,500 人以下であった。図 3 は、在外スペイン人の数の推移を示している。2017 年は、男性 1,186,400 人、女性 1,220,200 人、合計 240 万 6 千 600 人であった（Molina 2017）。

単位：千人

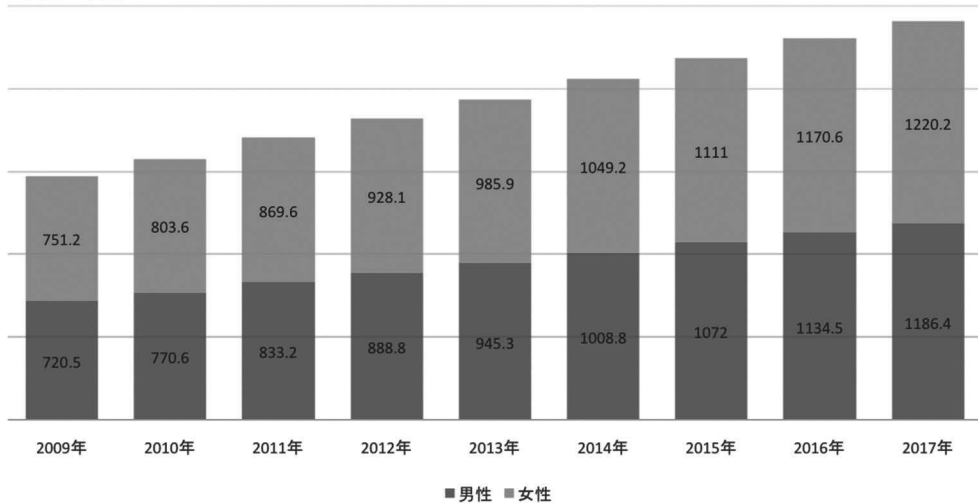


図3 在外スペイン人の数

移住については、「夢と希望のベルリン生活」(2015) (原題: *Perdiendo el norte*) が参考になるであろう。スペインで未来を見出せない若者たち(ウーゴとブラウリオ)が新しい生活を始めようと、ドイツに渡ったが、移住したもののうまくいくわけではないと気づかされる物語である。ウーゴとブラウリオがベルリンの新居に着いたとき、同居することになるラファというスペイン人から、何年も前にドイツに移住していた隣人で、同じくスペイン人の老人アンドレスを紹介される。次の会話から、スペイン人の移住の仕方が今と昔でどのように変わったかを読み取ることができる。

ラファ：新入りのスペイン人だ。ブラウリオとウーゴ。

アンドレス：ドイツ人はマジョルカ、スペイン人はここを目指す。国名を交換すればいいのに。

ウーゴ：僕らが来たのは専門分野を生かせるよりよい職を得るためだ。

アンドレス：専門分野を生かすだと？ とんでもなく能天気な奴らだ。

ブラウリオ：失敬な人だな。僕らは仕方なく来たんだ。

アンドレス：仕方なく？ その意味を分かっているか？ すし詰めの車でこの国に入り、日に12時間工場で働いた。仕方なく国を出る意味は苦勞してから語れ。根性なしのガキどもが。

ラファ：面白いジイさんだろ。

ウーゴ：何なんだよ。バカにしてる。僕はこの国に貢献できる人材だ。

アンドレス：2ヶ月だな。若造よ。二ヶ月で音を上げる。

ラファ：マジでウケるぜ。

本作品が伝えようとすることは、この後のアンドレスのセリフで理解できる。

アンドレス: 瀕死の国を飛び出し戻ってみれば過去を知るものは誰もいない。わしらは移民だからな。何も学んでない。何一つな。己の歴史を忘れる者は同じ過ちを繰り返す。お前はなぜここに来た？記憶ってやつはとても大事だぞ。聞いたか。ものすごく大事だ。忘れるな。

6. 高齢化

スペインは、21世紀の半ばに OECD（経済協力開発機構）加盟国の中で、日本に次いで2番目に高齢化が進んだ国である。

高齢化は先進国に見られるが、特にスペインでは差し迫った問題である。20歳から64歳までの人口において、65歳以上の率が2015年には30.4%であったが、2050年には77%になると予想されているためである。これは、OECD加盟国の中では、日本の78%に次いで2番目に高い率である。スペインの次はギリシャとポルトガルの73%、イタリアと韓国の72%と続く。Calvo (2017) によると、高齢化は社会の様々な面に大きく影響する。特に、高齢者にとって必要となる年金の資金調達が問題となる。このままでは年金に必要な財源を確保するための労働力が不足してしまう可能性がある。スペインでは、非正規の職歴を持つ学歴の低い人や女性への所定の年金を供給することが難しくなる。かつて、定年は68歳であったが、金融危機以来、多くの人が法的に定められた65歳よりも早い63歳前後で退職している。

図4は、65歳を超えた労働人口をパーセンテージで示したグラフである (Oliver 2017)。日本の42.8%に対し、スペインでは、わずか5.3%しか働いていない。

高齢化問題を取り上げている作品には、アニメ作品『しわ』(2011) (原題: *Arrugas*) が挙げられる。本作品は、2008年にスペイン漫画賞を受賞したパコ・ロカによる、同名の漫画を元に制作されたものである。アルツハイマー病を患った72歳の元銀行の重役、エミリオが老人ホームに入り、同室のミゲルをはじめ、入居者たちと友情を育んでいく物語である。

ミゲルはずる賢く、エミリオに老人ホームのいろいろなことを吹き込んでいく。他の登場人物は、聞いた言葉をずっと繰り返している元アナウンサーのラモン、進行したアルツハイマー病に苦しむ夫モデストを献身的に看病する妻ドロレス。また、孫を訪れる際に渡そうと朝食のバターやジャムを取っておくアントニアに、家族が迎えに来るのを待っている80代のソル、オリエント急行でイスタンブールに向かっていると思い、いつも窓のそばに

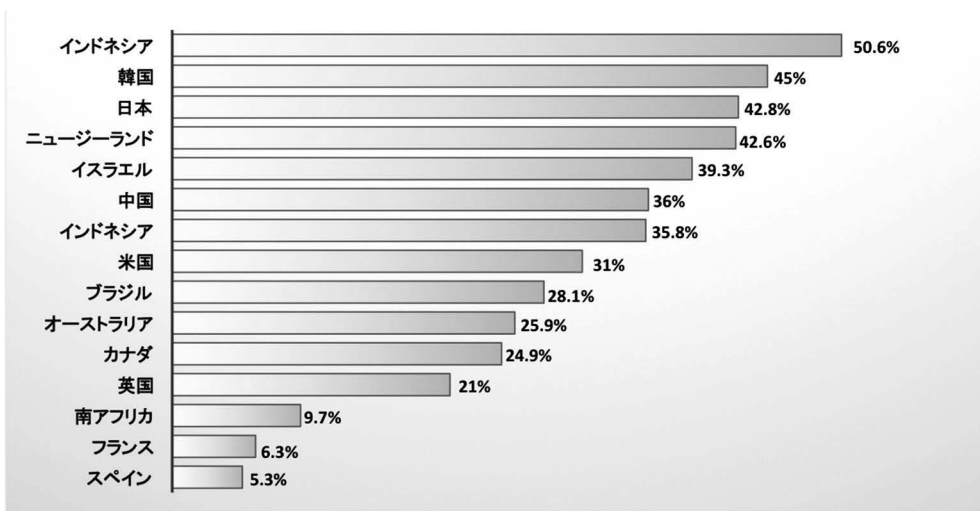


図4 2016年における65歳を超えた労働人口

座っているロサリオ。彼らを結びつけるのはただ一つ、重症患者が行く自由のない病棟に移されたくないという願いである。

『しわ』では、監督は老いやアルツハイマー病や精神異常など、そこから生まれる問題を厳しくも現実的に描いているが、ユーモアを交え、前向きな見方で示している。コミック作家であるパコ・ロカが『皺』を書いたのには二つの理由があった。一つは、両親が高齢になってきたこと、もう一つは、彼の親友の父エミリオがアルツハイマー病に苦しんでいたことである。ストーリーをできるだけ現実近づけるため、監督自身が、1年かけて、老年病理学に関する書物を読み、老人ホームを訪れ、お年寄りや看護師、患者の家族に実際に話を聞いたのである。

7. 同性結婚

図5が示すように、スペインは性的多様性の受け入れ率が最も高い国の1つである。ピュー研究所 (Pew Research Center 2013) によると、スペインはLGBT コミュニティの権利を88%という最高レベルで保護している国である。この調査で得られた各国のデータによると、同性愛の社会的受容は、宗教が人々の生活の中でそれほど重んじられていない国で特に広まっている。しかし、このデータからは、なぜカトリックの伝統を持つスペインが、世界で同性愛を最も受け入れているのかは読み取れない。

88%のスペインに次いで、ドイツが87%、カナダとチェコ共和国が80%と上位を占める。しかし、チェコ共和国では、法律上、異性愛者と同性愛者は同じ扱いを受けていない。一方、インドネシア、ヨルダン、エジプト、さらにはアフリカが最も低く、3%未満である。

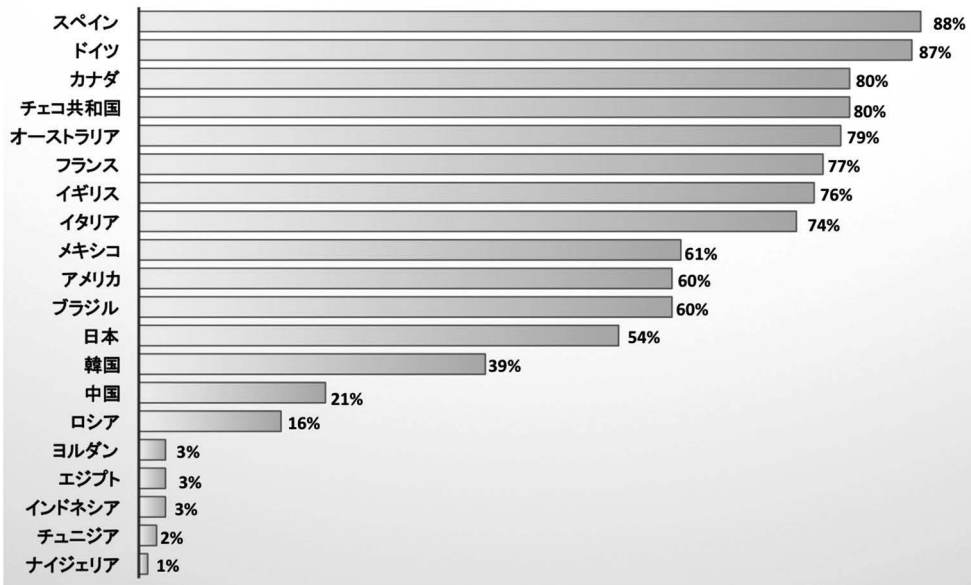


図5 各国における同性愛の受容度

2005年7月3日にスペインで同性結婚が合法化され、オランダ（2001年）とベルギー（2003年）に次いで世界で3番目の国となった。この法律には、共同養子縁組、相続、年金など他の権利も含まれている。法律が制定されて10年後、同性結婚について、スペイン人に賛成か否かが尋ねられた。その結果、85.5%の人々が賛成、11.3%が反対、3.2%が分からないと答えたか、不回答のどちらかであった（LaSextaのための Invyamar 研究所の調査 2015）。同じ調査で養子縁組について、72.6%の人々が賛成、22.6%が反対、4.8%が分からないと答えたか、不回答のどちらかであった。

同性結婚をテーマとした作品には、『女王様たち』（2005）（原題：Reinas）が挙げられる。本作品は、法律施行の3ヶ月前にスペインで公開されたものである。本作品では、合同同性結婚式を希望した5組の男性カップルが、その数時間前に繰り広げる人間模様に関心が当てられている。オフエリ、マグダ、レイエス、エレナ、ヌリアは、息子の結婚式に出席する準備をしている母親たちである。時間を前後させながら、結婚式前3日間のそれぞれのストーリーが展開され、彼女たちの奇妙だが愛情深い人間性が描かれている。息子たちは、恋をしている現代的且つ魅力的な同性愛者である（ウーゴ、ミゲル、ホナス、オスカル、ナルシソとラファ）。母親たちはそれぞれ、結婚の報告に対して同意もあれば拒絶もあり、受け止め方は様々だが、無事結婚式に参加するのである。

8. バスク祖国と自由

ETA とは、1958 年から 2011 年までバスク民族主義のテロリスト組織であった、「バスク祖国と自由」(*Euskadi Ta Askatasuna*)の頭文字をとったものである。目的は、スペインおよびフランスのバスク地方に社会主義国家を創設することであった。エウスカル・エリア(図 6 参照)と呼ばれるこの地域は、スペイン側のバスク地方であるビスカヤ、ギブスコア、アラバ、ナバラ(ナファロア)、フランス側のバスクであるラプルディ、低ナファロア、スベロアで構成されている。

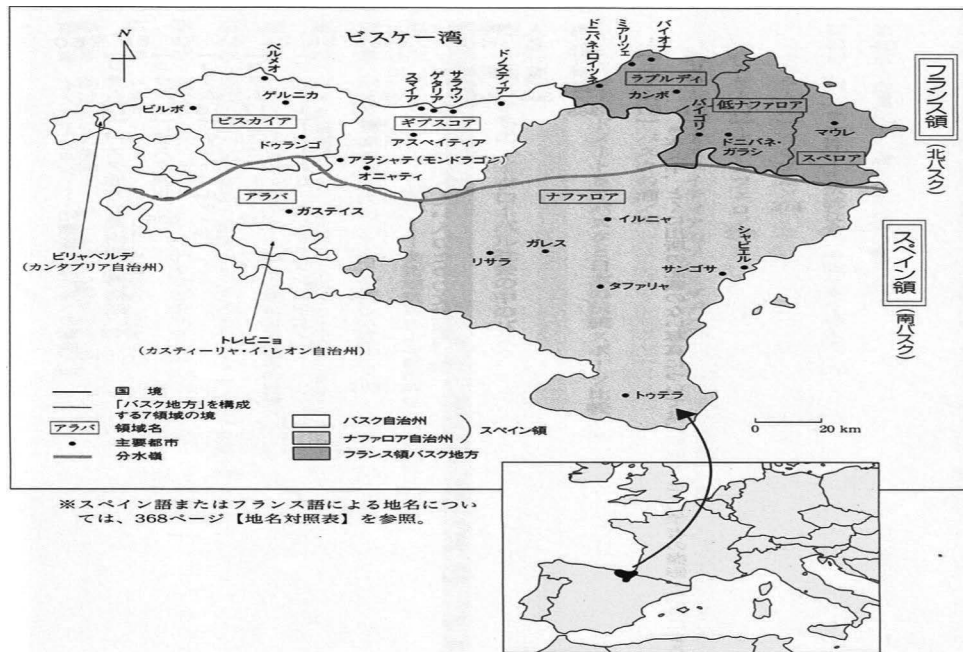


図6 エウスカル・エリア略図(萩尾・吉田 2012)

本組織は目的を達成すべく、殺人、誘拐、テロ攻撃、経済的搾取を行った。2011年の解散までの間、最も多くの殺人が行われたのは、民主主義への移行期であった(図7参照)。

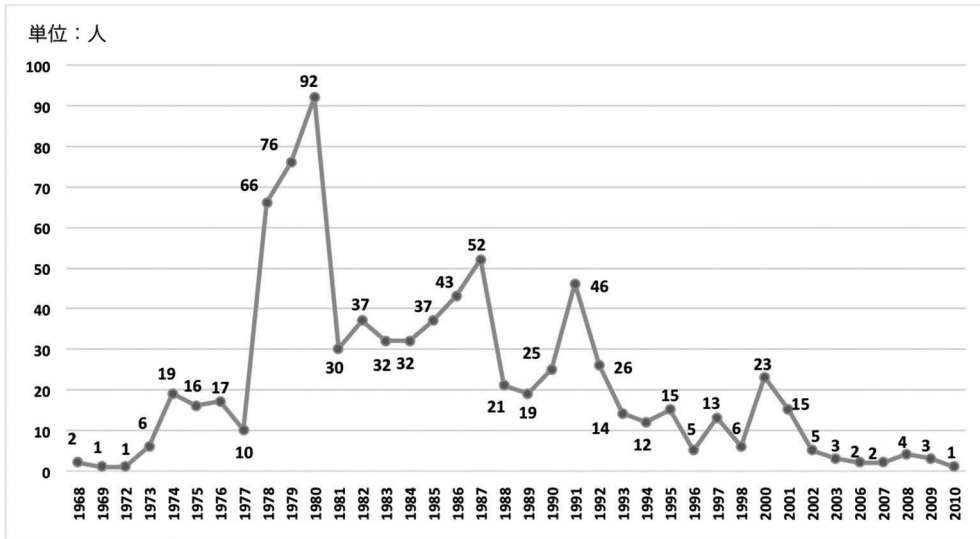


図7 ETAによる被殺害者数

約60年間の活動後、数年間の紆余曲折を経て2017年4月8日に、一方的且つ無条件の武装解除を発表した。折しも『となりのテロリスト』（2017）（原題：*Fe de etarras*）が公開された時であった。本作品は、4人のETAのメンバー（このうち一人はアルバセテの出身者）のコメディである。スペイン代表チームが優勝する南アフリカで行われたサッカーワールドカップが行われた2010年の夏、彼らは安全な場所で身を隠し、決して鳴ることのない、テロの合図の電話を待っている。

多くの場面で、テロリスト4人は、国家主義者の隣人やコロッケで彼らを歓迎しようとする高齢の隣人と仲良くし、あたかも普通の生活をしているかのように見える。電話を待ちながらゲームをしているシーンで、メンバーの一員であるマルティンがスペインを批判する。

[...]

アレックス：“スポーツ”。“5連勝のスペインのサイクリスト”。簡単だ。

アイナラ：わかる。

マルティン：間違いだ。

アレックス：どういう意味？

マルティン：スペインの選手は勝っていない。

ペルナンド：デルガドだ。

マルティン：いや、違う。問題の答えは分かるが、言いたくない。やり直し。

アレックス：チーズを賭ける。

マルティン：チーズ？

アイナラ：チェダーチーズよ。

ペルナンド：答えはデルガドだ。

マルティン：知るか。彼はバスク出身だから間違ってる。

ペルナンド：それはインドゥラインだ。

マルティン：彼もそうだ。デルガドの出身地ナバラは、本当はバスクだ。2だ。“芸術”。

アレックス：“欧州歌コンに子どもの出場は？”

マルティン：条件次第。

アレックス：答えは“可能”。

マルティン：バスク人は出場できない。

ペルナンド：ズビリ氏は？

マルティン：何だ？

ペルナンド：ナバラ出身の盲目の歌手だが、出場した。勝算は低かったが健闘したよ。

歌は確か、すてきなバラードだった。

マルティン：この質問はもういい。君の番だ。

アレックス：1、2、3、4、5、6。“科学”だ。

マルティン：“肥満の主な原因は？”

アレックス：砂糖だ。

マルティン：また違う。

アイナラ：なぜ“また”？

マルティン：スペインだから。

アレックス：肥満の原因がスペイン？

マルティン：知らんのか？学校の先生が言った。1492年にはなにが？新大陸の発見。

違う。アメリカは既にあってスペイン人は到着しただけだ。ヤツらはレイプし、盗んだ。バスク国にしたようにな。大陸から持ち帰ったものは？知らないか？教えてやる。チョコとポテトだ。太る原因になる食べ物のトップ2だ。スペインがなければ、肥満は広がらず。アメリカだけだった。チュロスもなかったはずだ。スペインはそれを隠したいんだ。

ペルナンド：答えは“砂糖”だ。

[...]

このようなスペインの歴史上最も重大で悲惨な出来事を扱うには、コメディーがいかにかにふさわしいかを、本作品は示している。

9. カタルーニャ独立運動

Guerrero (2017) によると、スペインとカタルーニャの間にはこれまでも様々な問題があったが、スペインの経済危機などにより、近年、独立への気運が高まっている。カタルーニャはスペインのなかでも裕福な自治州の一つであるが、その経済力を他の州のために割かなければならず、カタルーニャ人が自由に行使することはできない。また、言語の違いや国への帰属意識の欠如などのため、カタルーニャ人の大半が独立を求めている。カタルーニャ政府は、独立すれば経済が良くなるとともに、言語や文化も守ることができるようになるとしている。

2017年10月1日の独立住民投票では、「カタルーニャを共和国として独立させたいか」が問われた。その結果、投票率は41%で90.09%が独立を支持していた。カタルーニャ自治州政府（ジャンラリター・デ・カタルーニャ）の首相カルラス・プッチダモンは、投票結果を受け、カタルーニャはスペインから独立すると宣言した。当時のスペイン首相マリアーノ・ラホイは、独立を問う住民投票は違法であり、結果は認められないと主張した。数日後、スペイン政府は憲法第155条により、同州における自治権の停止を発表した。また、10月27日、法的根拠のない一方的な独立宣言が行われたため、スペイン政府はプッチダモン首相の解任と州議会の解散を決定した。それにより、ラホイ首相がカタルーニャ州首相の職を引き継ぐとともに、12月21日に州議会議員選挙を実施した。

本選挙の投票率は約80%と、これまでで最も高かった。最多票を集めたのは、100万人以上の支持を得て37議席を獲得したシウタダンス(市民等)であった。47.49%の票を得た独立派は合計70議席となり、過半数を獲得した。これにより、新たに州議会が発足し、2018年1月17日に、独立派のロジェ・トレン議員が議長に選任された。2018年3月、州議会はプッチダモンの遠隔地における首相就任を承認するため、首相府および内閣の法律の改正案を通した。2018年5月9日、憲法裁判所によりその改正案は差し止められ、違憲であるとされた。州議会は2018年5月14日、刑事訴追から逃れるべくベルリンにいたプッチダモンによって指名された候補者キム・トーラ議員を、新首相に選出した。

図8が示すように、調査会社GAD3がLa Vanguardia紙のために行った調査(Castro 2019)によると、現在、大半のスペイン人は、カタルーニャ危機を解決するには対話をすべきだとしている。スペイン人回答者の52.3%が「政府間で対話すべき」、34.2%が「憲法第155条を再適用すべき」、13.5%が「分からない/回答なし」であった。それに対し、カタルーニャでは、「政府間で対話すべき」が78.5%、「憲法第155条を再適用すべき」が13.5%、「分からない/回答なし」が8%であった。

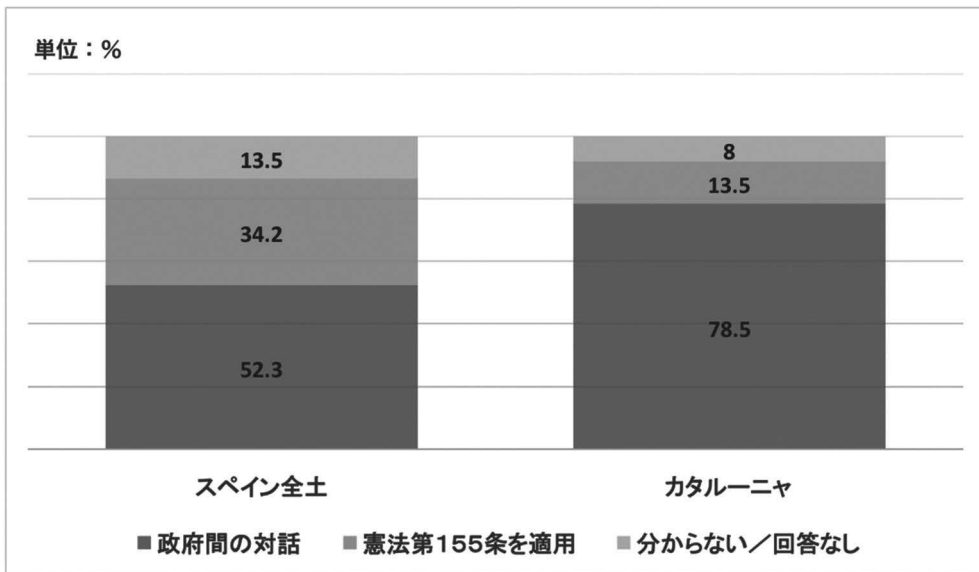


図8 カタルーニャ危機を解決する方法

この問題を理解するには、「オチョ・アペリードス・バスコス」(原題：*Ocho apellidos vascos*) (2014) の続編である「オチョ・アペリードス・カタラネス」(原題：*Ocho apellidos catalanes*) (2015) というコメディが適している。カタルーニャ人男性パウと恋に落ちたバスク人の元彼女アマイアと復縁しようと、アンダルシア出身の男性ラファがカタルーニャに乗り込むストーリーである。

実際のカタルーニャ独立宣言に先立つこと2年前、本作品内で同じことが描かれている。バスク独立運動と同様、スペイン社会におけるこの深刻な問題をおもしろおかしく扱っている。例えば、老女ロゼルが孫のパウにカタルーニャが独立したと信じこまされ、孫の結婚を村中に知らせるバルコニーのシーンである。彼女がバスク出身のアマイアを外国人と呼んだり(2人ともスペイン人である)、独立を実現したカタルーニャ人がまだ独立を果たしていないバスク人を嘲笑したり、村長がスペイン製品へのボイコットを求めたりする様子が描かれている。

ロゼル: 皆さん、来てくれてありがとう。ありがとう。カタルーニャ語が分からない人のためにここからはスペイン語で話すわ。私はずっと待ちわびていた。皆さんと独立の喜びを分かち合う日を。カタルーニャは素晴らしい土地よ。穀物はよく実り、大きな川が流れている。そしてこの町のサッカーチームはチャンピオンズリーグに将来出るわ。孫の願望だけだね。何より大切なことが明日行われる。孫のパウの結婚式よ。お相手はこちらの外国の女性。

ラファ： やあ、みんな。僕はオリオルだ。ありがとう。独立万歳！

村中： 万歳！

ラファ： 聞いてくれ。花嫁の父親から話がある。花嫁の父親、万歳！

カルメン(アマイアの父の恋人)： 孫の名前がバルトメウになる。

コルド(アマイアの父)： エパ！

ロゼル： すてきなあいさつだわ！ルイスは感動しているのね。バスクも私たちのように独立を目指しているのだから。

コルド： 僕を何と呼んだ？

ロゼル： ルイスよ。

ラファ： ルイス。勘違いだって。

カルメン： 私はルイスと呼んだのよ。

ロゼル： いいえ、マリアさん。ルイスは男性の名よ。

コルド： まあ、何だっがいい。俺の名前はコルド・スガスティだ。よく聞け。大切な話がある。さっきのことは水に流す。気にするな、ロサリオ。花婿にプレゼントがある。バスク十字の飾りがついたネックレスだ。これをつければ、お前もバスク人の仲間入りだ。ほら。

パウ： マイクを。すごい。いろんなネックレスがあるけど、これが一番だ。カタラン・オブ・ザ・イヤヤー。他にも芸術賞を受賞してきた。どんな賞よりも光栄なことだ。コルドさん、僕はこれを身につけない。これが僕を身につけるんだ。心からありがとう。

カルメン： もうプレゼントはないの。他に誰かプレゼントを持っていない？

ロゼル： 皆さん、少し落ち着いて。福引じゃないのよ。私からも 2 人にプレゼントがあるわ。聞いて、イメルダ。あなたはもうスペインに帰らなくていい。私の家を贈るからよ。ずっと独立したカタルーニャで暮らして。

アマイア： バスクに住むと。

パウ： 同じ世界に住むことに変わりはない。

アマイア： バカにしないで、約束と違うでしょ。

村長： これから祭りを始めます。出し物もありますよ。ロゼルの家に行く前にスペイン産の食事の食べ納めをしましょう。イベリコ豚の生ハムにリオハ・ワインです。カタルーニャ万歳！ロゼル万歳！

本作品を通して、カタルーニャに関する様々な固定概念が見える。例えば、カタルーニャ警察による暴力、カタルーニャ人のけちな性質、登場人物パウに集約される現代性（常にスペインの他の地域よりヨーロッパ的であると考えられている）、伝統文化（ネギ料理カルソッツ、人間の塔カステイ、民族舞踊のサルダーナなど）が挙げられる。また、ロゼルに見られるカタル

ーニャへの狂信的愛国心、ユーモアのセンスの欠如などである (Martínez 2015)。

10. おわりに

1975年のフランコ独裁政権の終焉は、民主的で多文化に富む現代スペインへの不安定な道を示すものであった。本稿では、スペインが経験した移り変わりを、映画を通して概観した。

スペインの民主主義への歩みは、政治的、社会文化的自由の表現が爆発した時期と捉えることができる。マドリードにおける「モビーダ」の先駆者、アルモドバル監督の作品である『ペピ、ルシ、ボンとその他大勢の娘たち』がその象徴である。

一方で、スペインには経済的に困難な時期があった。今もなお失業の増加は続いている。その問題は、フェルナンド・レオン・デ・アラノア監督による『月曜日にひなたぼっこ』で見事に描かれている。

統計によると、スペインは移民を受け入れる国から移民を出す国へと大きく変化した。その変化をテーマとした作品として、イシアル・ボジヤイン監督の『他界の花』およびナチョ・ガルシア・ベリージャ監督の『夢と希望のベルリン生活』を挙げることができる。

また、スペインは世界でも高齢化の進んだ国である。イグナシオ・フェレーラス監督は、スペインが直面しているこの問題を『しわ』で扱っている。

今世紀におけるスペインにとっての大きな変化は、世界で3番目となる同性結婚の合法化であった。マヌエル・ゴメス・ペレイラ監督の『女王様たち』では、2005年の合法化の数ヶ月前に、すでに同性愛者の最初の結婚式が描かれている。

今日、スペインにとって深刻な政治的、社会的問題は、テロリズムとカタルーニャ独立運動である。しかし、苦境に立たされても、それを笑いに変えるスペイン人気質を表す例として、2つのコメディー、『となりのテロリスト』(ボルハ・コベアガ監督) および『オチョ・アペリドス・カタラネス』(エミリオ・マルティネス=ラサロ監督) を取り上げた。

参考文献

- Andrés, E. (Writer & Director). (2004, March 15). España en libertad [Television Series Episode]. In A. de Masy (Producer), *Memoria de España*. Spain: TVE (Televisión Española). <http://www.rtve.es/alacarta/videos/memoria-de-espana/memoria-espana-espana-libertad/1506079/>(閲覧日: 2019年4月2日).

- Augustín, A. and Salazar-Simpson, G. (Producers) & Martínez-Lázaro, E. (Director). (2015). *Ocho apellidos catalanes* [Motion Picture]. Spain: Telecinco Cinema, Lazona Films.
- Calvo, A. (2017). [La OCDE advierte de que en España peligran las pensiones “decentes”]. <https://www.lavanguardia.com/economia/20171018/432159698286/ocde-pensiones-espana-jubilacion.html> (閲覧日: 2019年4月2日).
- Castro, C. (2019). [La mayoría de los españoles elige el diálogo para resolver la crisis catalana]. <https://www.lavanguardia.com/politica/20190217/46528947189/la-mayoria-de-los-espanoles-elige-el-dialogo-para-resolver-la-crisis-catalana.html> (閲覧日: 2019年4月21日).
- Centro de Investigaciones Sociológicas (2015). [Barómetro de febrero 2015]. https://web.archive.org/web/20150318105550/http://datos.cis.es/pdf/Es3052mar_A.pdf (閲覧日: 2019年4月2日).
- Coromina, P., Delgado, P. and Rambal, E. (Producers) & Almodóvar, P. (Director). (1980). *Pepi, Luci, Bom y otras chicas del montón* [Motion Picture]. Spain: Figaró Films.
- Cristóbal, M. and Ivern, O. (Producers) & Ferreras, I. (Director). (2011). *Arrugas* [Motion Picture]. Spain: Perro Verde Films, Cromosoma.
- Cuesta, C. (2014). [Crítica de Crítica de ‘Pepi, Luci, Bom y otras chicas del montón’: El A, B, C de Almodóvar concentrado en una píldora pop]. <https://noescinetodoloquereluce.com/2014/05/critica-de-pepi-luci-bom-y-otras-chicas.html> (閲覧日: 2019年3月24日).
- Derecho Ciudadano a Decidir (2016). [Los fieles difuntos versus los espíritus malignos de Halloween]. <http://derechociudadanoadecidir.es/los-fieles-difuntos-versus-los-espíritus-malignos-de-halloween/> (閲覧日: 2018年12月22日).
- Escolar, J. L. (Producer) & Gómez Pereira, M. (Director). (2005). *Reinas* [Motion Picture]. Spain: Warner Bros. España, Lucky Red, Fortissimo Films, Canal + España, Antena 3 Films.
- García de Leániz, S. and González Macho, E. (Producers) & Bolláin, I. (Director) (1999). *Flores de otro mundo* [Motion Picture]. Spain: Alta Films.
- Guerrero, F. (2017). [Cataluña: entendiendo la independencia]. <http://ufoellapiz.com/2017/11/02/846/> (閲覧日: 2019年4月21日).
- 萩尾生・吉田博美 (編者) (2012). 『現代バスクを知るための 50 章』. 東京, 明石書店.

- Instituto Nacional de Estadística (2018). [Encuesta de Población Activa (EPA). Tercer trimestre de 2018]. <https://www.ine.es/daco/daco42/daco4211/epa0318.pdf> (閲覧日: 2019年4月2日).
- Querejeta, E. and Roures, J. (Producers) & León de Aranoa, F. (Director). (2002). *Los lunes al sol* [Motion Picture]. Spain, France, Italy: MediaPro.
- LaSexta.com (2015). [El 85 % de los encuestados, a favor del matrimonio homosexual en España]. https://www.lasexta.com/noticias/nacional/encuestados-favor-matrimonio-homosexual-espana_201506305724d6b84beb28d44600e099.html (閲覧日: 2019年4月2日).
- Lejarza, M., Gamero, M., Fernández-Vega, I. and García Velilla, N. (Producers) & García Velilla, N. (Director). (2015). *Perdiendo el norte* [Motion Picture]. Spain: Atresmedia Cine, Producciones Aparte and Telefónica Studios.
- Mendez, J. (Producer) & Cobeaga, B. (Director). (2017). *Fe de etarras* [Motion Picture]. Spain: Netflix, MediaPro.
- Molina, C. (2017). [La emigración española toca máximos históricos]. https://cincodias.elpais.com/cincodias/2017/03/15/economia/1489589762_376211.html (閲覧日: 2018年12月22日).
- Moreno, G. (2017). [Los inmigrantes más numerosos en España]. <https://es.statista.com/grafico/10102/los-inmigrantes-mas-numerosos-en-espana/> (閲覧日: 2018年12月22日).
- Oliver, L. (2017). [The countries where people are working beyond 65]. <https://www.weforum.org/agenda/2017/12/chart-of-the-day-where-people-are-working-beyond-65/> (閲覧日: 2018年12月22日).
- Pew Research Center (2013). [Global Acceptance of Homosexuality]. <https://www.pewglobal.org/2013/06/04/global-acceptance-of-homosexuality/> (閲覧日: 2019年4月2日).
- Ravachino, G. (n.d.). [Cineismo recomienda *Los lunes al sol*]. <https://www.cineismo.com/criticas/lunes-al-sol-los.htm> (閲覧日: 2019年3月26日).

El cine como reflejo de la sociedad: transformación de España desde la Transición

Juan ROMERO DÍAZ

Universidad de Estudios Extranjeros de Kobe

RESUMEN

El fin de la dictadura franquista en 1975 supuso un azaroso camino hacia la democracia que ha derivado en una España moderna, superdiversa y multicultural. En este artículo se presenta la transformación experimentada por España desde entonces a través del cine. Para ello, se han elegido ocho temas clave de la sociedad española de este periodo y una película representativa para cada uno de ellos, a saber: la Transición (*Pepi, Luci, Bom y otras chicas del montón*), el paro (*Los lunes al sol*), la inmigración (*Flores de otro mundo*), la emigración (*Perdiendo el norte*), el envejecimiento de la población (*Arrugas*), el matrimonio entre personas del mismo sexo (*Reinas*), ETA (*Fe de etarras*) y el independentismo catalán (*Ocho apellidos catalanes*).

Palabras clave: sociedad española, cine, Transición